

Title	シンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」の企画にあたって
Sub Title	
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2000
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.5 (2000.) ,p.59- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 「有賀喜左衛門と社会学」
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20000000-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」の企画にあたって

川合 隆男

三田社会学会の第12回大会は、1999年7月10日（土）の午後に自由報告に次いでシンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」と題して企画開催された。報告は、中野卓（日本社会学会顧問）：有賀喜左衛門の研究法、柿崎京一（早稲田大学）：有賀喜左衛門と村落の研究、平野敏政（慶応義塾大学）：生活組織としてのイエと全体的相互給付関係、の三先生にお願いして、討論者として中筋直哉（山梨大学）、柄沢行雄（常磐大学）、三浦直子（慶応義塾大学）、坂井達朗（慶応義塾大学）の諸氏に加わっていただいた。

企画するに際してわたしなりに悩んだことを書き留めておきたい。大会にシンポジウムを導入することを提案して、第10回大会（1997年7月）より開始され「奥井復太郎生誕100年記念」（企画、藤田弘夫さん）、第11回大会（1998年7月）「三田におけるマス・コミュニケーション研究の系譜と伝統」（企画、青池慎一さん）を受けて、次は「有賀喜左衛門と社会学」をシンポジウムで取りあげてみてはと提案してはしてみたものの、わたしが企画者として相応しいかどうかということがわたしなりにまず第一に悩んだことのひとつである。適任者と考えていた方々がどなたもご多忙なこともあって事態の経過とともにわたしが企画を引き受ける羽目になってしまったからである。

いざシンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」の企画を考えて、少し自分でも調べだしてみると、有賀喜左衛門先生（1897-1979、明治30-昭和54、82才で逝去）の切り拓いていった学問的な広がりや深さ、そして有賀先生の人間的魅力の大きさ、強烈さに圧倒されて、凡庸なわたし如きものはたしてこうした企画など出来るだろうか、別の形での企画構想も可能だったろうと思ひ知らされた。

有賀は、「民族の心を求めて」（NHK編『わたしの自叙伝（1）』1979）のなかで、「後に柳田民俗学だけでは満足できなくなり、社会学、文化人類学（民俗学）、経済学、法制史学、宗教学などにも広く関心を持つようになりましたが、わたしの道は容易に開かれませんでした」¹⁾と述べている。わたしを含めて最近の社会学者の研究関心や態度は始めから社会学を専門領域としてそのなかでも次第に細分化した研究テーマに走りがちである。有賀はいくつもの重要な遍歴のなかから文学、美術史、民俗学、経済学、法制史学、歴史学、社会経済史、宗教学等と広く交錯しつつ社会学を位置づけていった。学問分野の専門化や細分化に関心があるのではなく、人間の歴史的現実としての生活事実を基礎に複眼的・複合的・歴史的考察、洞察が試みられている。学問対象も村落-都市-全体社会との歴史的連関、生活意識-生活関係-生活組

織、社会関係と類型論、生活史—生活組織—民族、文化、文明、近代化論等と広範に展開していく。

有賀先生の人的魅力についてもあらためて再認識する機会となった。有賀道夫は、長野県上伊那郡朝日平出村（ムラ）の庄屋・本陣をとつめた有賀本家の長男として生まれ、2才で母親を亡くし9才で父親を失い、幼くして七世喜左衛門を襲名している。諏訪中学、第二高等学校、そして東京帝大法学部入試に失敗、京都帝大法学部に入学するが1年で中退、京都・奈良などをよく歩き旅をする。東京帝大文学部美術史学科に入り柳宗悦などの運動に強い刺激を受けつつ卒業論文は「新羅の仏教美術について—特に慶州石窟庵を中心として—」を書き、その過程で「芸術は民族の心」、「これと共に深い印象を刻んだのは、朝鮮の都市や農村で接した彼らの生活ぶりでした」と記して、「日本人を知るためには、土着の田舎人を考えなくともいいだろうかという思いが湧いて」人々の生活に根ざした視座が培われていった。晩年に至って生涯を顧みて、「わたしはこれまで何になろうと思ったことはありませんでした。人間の一生は予期しない展開をすることを改めて感じるのです」²⁾と述べている。

先の戦争の経験について有賀は「この戦争について日本人は世界に対する重い責任を負うことから逃れることはできない」とし、「戦前に持った国家目標を払い落として戦後の日本は出発したが、経済大国の目標には同じ影がちらついていないだろうか。与えることを知らない生き方はまた同じ結末を見ないとも限らない。個人の生き方と国の生き方とが違はずはない。お互いに与え合うことによって、人々の心は豊かになり、生きることの正しい目標を持つことができるのではないだろうか」³⁾と問いかけている。

このように考えると短い時間でのシンポジウム形式で、わたしが企画して「有賀喜左衛門と社会学」という限定した題で、はたして有賀先生の学問の全体像と人的魅力を深く考察していくことがどこまで可能だろうかという悩みが続くことになった。しかし、企画にそって手紙を差し上げたり交渉していく過程で、報告者として有賀先生に間近に直接に教えを受けられた中野卓先生・柿崎京一先生・平野敏政さんのご了承を得、討論者として中筋直哉・柄沢行雄・三浦直子・坂井達朗さんの諸氏のご協力がどうにか得られることになり、三田社会学会のような小さな学会でも有賀先生についてのシンポジウムを開くことができるという喜びに変わっていった。

1957年3月に東京教育大学を定年で退官して、有賀先生が慶応義塾大学文学部哲学科（社会学）の教授になられたのは同年（昭和32年）4月であった。その後、1965年3月にこの当時の定年制で慶応をご退職されて（68才）、日本女子大学学長になられる迄慶応で教授として8年間教鞭をとられた。以後も激務のなか晩年まで慶応の大学院社会学研究科で非常勤講師をつとめられて、多くの方々が教わり学界に育っていった。わたしは有賀先生が慶応にこられた同じ年の4月に法学部政治学科に入学でき、三田に移った3年生、4年生時に単位にはならなかったが文学部の有賀先生の「農村社会学」をもぐりで聴講して、出来の悪い学生ながら先生の学問に立ち向かう真摯な姿勢と情熱とを感じ取ることができた。

有賀先生は慶応に文学部教授として在職中にも 1960 年 11 月より 1962 年 10 月まで日本社会学会の会長の重責を担い、またこの前後から有賀・小池基之・中井信彦先生など慶応の先生方と共に「慶応義塾大学村落調査会」をつくられて諏訪の南真志野ムラの現地調査を試み調査活動も活発に実施しておられた時期でもあった⁴⁾。わたしは、丁度大学院社会学研究科に進学していたが、自分の修士論文（「社会移動と村落構造の変容」）の調査などもあってこの南真志野調査には参加しなかったのはいま振り返るととても残念であった。当時院生で参加されていた同輩の大淵英雄さんや（故）市川統洋さん達が調査体験などを話されていたのを想い起こしている。また、修士論文については有賀先生が副査になって下さって論文審査の時間とは別にあらためて時間をとって講評して下さいました。先生の研究室のあるかつての旧第 3 研究室（現在の大学院棟のあたりにあった）の部屋で、米地実さんも先輩として同席してくれたところで先生が暖かく励まして下さった部分だけをいまは懐かしく思い起こすのである。

博士課程 1 年の時には有賀先生の「農村社会学」を履修したが、丁度アメリカ科学振興協会と日本学術会議との共催による「日本における科学について」のシンポジウムで先生が「日本の近代化の社会学的研究」を発表なさるために準備しておられて、その内容を講義して下さいました。この時には学問的な文脈や歴史的社会的な文脈も理解し得ずに夢中でノートをとっていたが、その「近代化」論にしろ、また遺稿となった「外国文明と日本文化—新しい文明論—」にしろ、先生の歴史的洞察は依然として大きな問題提起を投げかけているといえるだろう⁵⁾。

今回のシンポジウムの企画が確かに限られたものであったとしても、有賀先生の残された学問的遺産、知的遺産ははるかに大きいし、更に新しい学問動向を貧欲に吸収しつつも、有賀先生を始め多くの方々の遺産の批判的継承という重要な課題も依然残されている。シンポジウムにご参加いただいた多くの先生方、諸氏に深謝申し上げます。

【註】

- 1) 有賀喜左衛門「民族の心を求めて」NHK 編『わたしの自叙伝 (1)』日本放送協会、1979、121 頁
- 2) 同上、98 頁
- 3) 有賀喜左衛門「与えること」窪徳忠・佐々木雄司編『生命哲学のすすめ』有斐閣選書、1976、4 頁
- 4) 有賀喜左衛門「村落における氏神祭祀組織と政治・経済構造との関連：長野県諏訪市湖南真志野—中間報告—」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 1 号、1962
- 5) 有賀「近代化と伝統」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 4 号、1964、有賀「日本の近代化の社会学的研究」『有賀喜左衛門著作集Ⅳ』所収、未来社、1967、有賀「外国文明と日本文化—新しい文明論—」有賀・中野卓編『文明・文化・文学』所収、御茶の水書房、1980

(かわい たかお 慶応義塾大学法学部)